

# あそびの屋台村

## ～つながろう！ 福島の子供たち～

幕田晋市

福島県福島市 御山学童クラブゆずっ子 指導員

福島市の学童保育の  
子どもたちの放課後のいま

二〇一一年三月の東日本大震災と、それにつづく福島第一原発の事故による放射能の不安は、福島県をはじめ、日本全体に多大な影響を与えました。震災直後から、保護者の要望と行政からの要請もあって、水など生活物資が不足し、放射能による保護者の不安があるなかでも、市内の学童保育は子どもたちが健やかに生活できるようにと努力を重ねてきました。

いま、子どもたちは徐々に元の生活を取り戻しつつありますが、生活空間や自然体験などを制限され、以前のようにならぬままあそびを取り戻せてはいません。また、そうしたこともあって、上級生から下級生へと受け継がれてきたあそびの糸が切れてしまったようにも思われ、とても残念です。上級生が下級生を思いやる心、下級生が上級生

を慕う心など、人間関係を育てる環境が減ってしまったことを心配しています。

「あそびの屋台村」の開催を！

御山学童クラブゆずっ子も所属している福島市学童クラブ連絡協議会（以下、市連協）は、震災後、市内の学童保育だけではなく、福島県内の学童保育との情報交換からはじまり、福島県学童クラブ連絡協議会の設立など、積極的に活動を行ってきました。そのなかで、指導員の立場から「大人たちが子どもたちのためになにができるのか」と考えたことが、子どもが存分にあそびを楽しめる催しとしての「あそびの屋台村」のはじまりでした。

今回の「あそびの屋台村」は、学童保育のなかでの「あそび」を通して、子どもたちも保護者も、そして指導員同士もつながることが大事だということ

を確認する場と考えました。同時に、学童保育の楽しさや役割を参加者が実感できるものとして開きたいとの思いもありました。市連協としては初めての企画であり、開催のイメージすらできないうちに、二〇一三年八月に実行委員会が立ち上がりました。

目を輝かせてあそぶ子どもたちの姿が！

そして当日、二〇一四年三月八日。会場の福島市国体記念体育館を運動製作、伝承の三つのブースにおおむまかに分け、それぞれのあそびを提供できるようにしました。

運動ブースでは、ドッジボールやリレー大会、振興スポーツのキンボールなど体を使ったあそびを準備しました。初対面の子ども同士でも普段はできないスポーツを楽しんでいました。製作ブースでは、普段、学童保育で行っていないの多い、新聞紙や牛乳パックを

使った製作あそびを準備しました。担当者だけでは対応がむずかしいほど子どもたちが集まり、楽しみ、準備した材料がなくなってしまうほどでした。

伝承ブースでは、ヘーゴマの講師を招いた講習会や、竹馬、カンポックリ作製などを準備しました。子どもたちは、目を輝かせてあそんでいました。

参加者数は、最終的には、七七〇名となりました。当日、参加した子どもたちからは、「もっとあそびたかった」「楽しい」「今度はいつやるの？」といった声が聞かれました。後日、行ったアンケートでも、「楽しすぎて、あっという間に過ぎた時間でした」「充実した内容だったので次回も開催してほしい」「子どもと一緒に保護者も参加できるブースもあり、よかった」との声が寄せられており、企画内容については大成功だったと思います。

開催しての感想と今後の課題

企画運営を担った実行委員は、日常的には交流のない学童保育の指導員がほとんどでした。当初は不安もありましたが、準備を進めるうちに交流が深まり、お互いにいい刺激や経験になったようです。「子どもたちのため」という目標のもと、結果として指導員同士のスキルアップにもつながりました。

運営上の不備や各学童保育への周知など課題も残りましたが、子どもたちが没頭してあそべる場をつくれたことがうれしく思います。各指導員が、それぞれの学童保育に戻り、日頃の保育のなかでもこの経験を生かしてもらえればと思います。

もっともっと子どもたちの笑顔が見られますように!!